

いわゆる「個人的所有の再建」について

田上孝一*

On the So-called “Re-establishment of Individual Property”

TAGAMI Koichi*

キーワード：『資本論』、疎外論的思考、個人的所有、私的所有、生産物の獲得、所有原理の否定

周知のように『資本論』全三巻の内マルクス自身の手により出版されたのは最初の一巻だけで、残りの二巻はエンゲルスによりマルクス没後に刊行されたものである。このため、仮に二巻と三巻の主旨や結論が不明瞭だとしても、マルクスのみ責任に帰すことはできない。しかしマルクス本人によって出された第一巻が、その高度な体系性にもかかわらず最終的な結論が不明確だとしたらどうだろうか。そしてこれは仮ではなく、実際の話である。

正確に言えば、『資本論』の第一巻でマルクスが結論を述べていることは確かであり、その箇所がどこなのかも明瞭である。しかしその最も重要な結論の内容が、誤解の余地なく明確というには程遠いということだ。

どうしてこのようなことになっているかといえ、この手の体系的な大著によくあるように、『資本論』が序論や緒論なりで全体の要点を始めにまとめておくという作法を取っていないからだ。『資本論』といいながら、そもそも資本概念それ自体が予め定義されてから、丁寧にその内容が説明されるというような構成になっていない。そのためこれまでの読者の多くが、『資本論』には資本そのものの定義的説明がないと思いついてきたのも、もともとである。

しかし実際には『資本論』第一巻の中には、資本それ自体への定義的な説明が随所に織り込まれている。それらの文章の中で、最も簡潔なテーゼの体を成しているのが、「人間が宗教の中で彼自身の頭の

作りものに支配されるように、資本主義的生産の中では自身の手の作り物に支配される」(MEW Bd.23. S.649)という一文である。

つまり資本とは、フォイエルバッハが神の中に人間の疎外された本質を見出したように、経済的土台において人間が自己自身から疎外されることによって生み出されるものなのである。従って資本の克服は経済活動の疎外的性格をなくすことによって成される。経済はマルクスによって、生産から始まり分配と交換を経て消費に終わる円環的な再生産過程だとされた。生産は結果から見た労働であり、労働は各生産様式に包摂された労働過程の中で実現される。労働者が作り出した生産物が労働者から疎外されて労働者に対抗する強力に転化したのが資本である。労働生産物の疎外は労働過程から労働者自身が疎外された結果である。つまり資本の原因は労働者の労働過程からの疎外である。資本は労働がその疎外的性格を失うことによって止揚される。だからそれが何であるかの説明が『資本論』の結論となる。問題はマルクスが、明らかにそのような結論を述べているにもかかわらず、説明なしに独自の熟語を鍵概念として使ったために、その真意が不明瞭になってしまったことである。言うまでもなくこれが、いわゆる「個人的所有の再建」の箇所である。ではこの箇所でマルクスは何を言わんとしたのか。最初に問題の箇所を引用提示したい。

資本主義的生産から生まれる資本主義的獲得様式は、だから資本主義的私的所有は、自己労働に基づく私的所有の第一の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然史的な必然性をもって、それ自身の否定を生み出す。それは否定の否定である。これは私的所有を復元しはしないが、恐らくしかし、資本主義時代の成果の基礎の上に個人的所有を復元する。協同と土地と労働それ自身によって生産される生産手段の共同占有（*Gemeinbesitz*）の基礎の上に、個人的所有を復元するのである（MEW Bd.23. S.791）。

この箇所が分かり難いというのは出版当時からのようで、この箇所を論難したデューリングに対してエンゲルスは挑発的に、ここには曖昧さは微塵もなく、個人的所有とは生産物すなわち消費対象の所有のことだとしたのである（MEW Bd.20. S.122）。

確かに最後の一文は「生産手段の共同占有の基礎の上に、個人的所有を復元する」のだから、生産手段は共同占有で消費手段は個人所有というのはすっきりとした読解といえるかもしれない。しかしこれは、消費手段というのが通常理解されているように、個人的な生活財のことを意味しているとしたら、極めて不自然で違和感がある解釈だと言わざるを得ない。というのは、ここで議論されているのは資本主義後の社会のあり方であり、生産様式の基本的性格を決定するのは消費手段ではなく、生産手段だからである。それにここという個人的所有は、私的所有と対になっている。個人的所有が消費手段のみであるのならば、私的所有も専ら消費手段の私有を意味するはずだが、明らかにそうではなく、生産手段の私的所有が主として意図されている。

最も重要な論点は、ここで個人的所有が全体の目的として描かれていることである。生産手段の共同占有を手段として実現される目的が個人的所有だという流れになっている。もし個人的所有がただ消費手段のみを意味するならば、消費手段の所有が資本主義克服後に実現されるべき社会の主目的ということになる。これは文字通りに受け止めれば実に貧困な理想社会像になる。実際現実社会主義が標榜した共産主義の理想というのはこの手のものだった。かつてフルシチョフは、ソ連ではアメリカで一

部の人々が享受している消費の喜びを全人民に与えることができると宣伝していた。資本主義を否定するはずの共産主義が、資本主義的な消費至上主義を無批判的に受け入れていたという笑い話である。

ともあれ、ここにいう個人的所有が専ら消費手段ではあり得ないのは、同じように共産主義の基本性格を位置付けた、この文章同様に有名な『フランスにおける内乱』の次の一文からも明らかだろう。

コミュニオンは、彼らは叫ぶ、所有を廃絶しようとしている、全ての文明の基礎を！その通りだ、諸君、コミュニオンは多数の労働を少数の富にする階級所有を廃絶しようとした。それは収奪者の収奪を目的とした。それは、今は主に労働の奴隷化と搾取の手段である生産手段、土地と資本を、自由でアソシエートした労働の単なる道具に変えて行くことによって、個人的所有を一つの真実にしようと望んだ。……もし連合した共同組合が共通の計画の上に国家的生産を規制し、そうして生産を彼ら自身のコントロールの下に置き、資本主義的生産の宿命である不断のアナーキーと周期的痙攣を終わらそうとし続けるならば、——それこそ、諸君、共産主義、“可能な”共産主義ではなくて何なのか？（MEGA I-22. S.142-143）

労働者の手の作り物である生産手段が労働者を使う社会が資本主義なのだが、革命によって生産手段は自己目的な運動の主体ではなくて、アソシエートした労働者のための手段となる。こうして「収奪者の収奪」によって生産手段を目的から手段に転化させることで実現するのが個人的所有である。文脈からして明らかに個人的所有を実現することが革命の目的であり、実現された個人的所有が可能な共産主義とされている。もしこれが消費手段の所有だとしたら、革命の目的は消費至上主義の実現ということになる。明らかにおかしい。そもそも生産様式は消費手段ではなくて生産手段のあり方によって規定されるのだから、これを専ら消費手段と見なすことで文章全体が意味の通らないものになる。

どうやら個人的所有を専ら消費手段とすることはできないようである。ではそれは逆に専ら生産手段を指すのだろうか。だとしたら改めてそれはどう

いう意味なのか。もう一度『資本論』に戻って問題の文章を、全体の文脈の中から見つめ直してみたい。

件の文章は『資本論』第一巻の第24章、いわゆる本源的あるいは原初的蓄積章の最終節で、資本主義的蓄積の歴史的傾向を総括した箇所を締めくくるものである。資本主義が結局どうなるかを予測した箇所であり、だからこそ『資本論』全体の結論ともなる。『資本論』第一巻自体はこの後にも植民地についての章が重なるが、実質的な結論節といえる。

それだからこそ一番大事な結論部分で曖昧な議論がなされていることに困惑せざるを得ないのだが、『資本論』第一巻の本当の最後の最後に書かれた一文が、個人的所有概念を考える上でヒントになる。そこには資本主義的生産様式はイコール資本主義的私的所有であり、それは自己の労働に基づく私的所有の絶滅、それはまたイコール収奪者の収奪なのだが、これを条件にすると述べられている(MEW Bd.23. S.802)。つまり、件の文章でもあるように、資本主義によって奪われるのは、労働者が自らの生産物を自らのものとして私的に所有するあり方だということである。

こうした労働は自作農などの小規模生産者の労働に典型的であるが、このような労働が否定されることにマルクスは繰り返し、「収奪」という強い言葉を用いている。ということは、労働者が自らの労働の果実を私的に所有することは正当であり、これを非労働者が我が物とするのは不当であるとの価値判断をマルクスがしていたことを示唆する。

なぜマルクスがかような価値判断をしていたかといえば、マルクスが資本主義の根底に主体と客体の転倒を見ていたからである。

議論の詳細は別稿で行なった(拙著『マルクス疎外論の視座』本の泉社、2015年、参照)ので要点だけ記すが、マルクスによれば資本主義とは労働者ではなく資本が社会的総生産過程の主体である社会であり、労働過程は資本によって生産実現のための手段として使われ、それにより労働過程の実体的中心をなす労働者は客体化されている。これをマルクスは転倒した否定的な事態と見ているのだが、こうした転倒により労働者は生産手段を使うことができず、むしろ生産手段である資本によって使われている。もし労働者が生産手段を私有していれば、

生産手段によって使われる転倒は起きない。生産手段を私的に所有する労働者の生産過程では、労働過程と生産過程の乖離は起きず、労働過程と生産過程の主体は一致している。

このような労働は、資本主義の生成過程で駆逐された自作農のような小規模生産者に典型的であり、古代奴隷制社会でも局地的な例外としての自給自足的労働において実現していた。小規模経営における労働のあり方はマルクスによって、「社会的生産と労働者自身の自由な個性の発展にとっての必然的な一条件である」(MEW Bd.23. S.789)とされた。しかもマルクスは、このような労働者の自由な個性の発展には、労働者が生産手段を完全に私有していることが望ましいと示唆している。

しかしマルクスはこうした生産手段の私有に基づく小規模生産が、資本主義的な高度生産力の中に駆逐されて、そのまま復活することはあり得ないとした。

だから、資本主義的ではないあり方で復活するのである。これが「個人的所有の再建」である。この再建は、既にあった小規模分散生産が解体された後に、そこで部分的局所的に実現されていた労働者自身の自由な個性の発展をより高度な次元で再現することであり、この意味では再建というより復元と訳したほうがいいように思われる。

ともあれ、こうしてなぜマルクスが個人的所有という、よく分からない言葉を使ったのかということが推測できる。マルクスは労働者が生産手段を私的に所有することの積極的な面を見ていた。しかし、私的所有は資本主義の原理であり、ポスト資本主義社会では否定される。そのため、生産手段は私有されるのではなく、占有される。しかも占有のあり方は、資本主義のように少数の巨大資本に寡占される傾向に従うことはなく、個々の労働者の利害を代弁する形で、労働者のアソシエーションによって共同で占有される。

ではこの共同占有を前提とした個人的所有とは何であろうか。それは私的所有の原理が否定された後で、しかし対象を私的に所有することならぬ対象それ自体を十全に我が物とすることである。それはつまり疎外されない対象化であり、対象の獲得(Aneignung)である。獲得は疎外の反対概念であ

り、個人的所有は疎外されない所有のあり方である。この点は、次の指摘によって気付かされた。

マルクスが「個人的所有の再建」と書いたとき、彼の念頭にあったのは、かつての疎外論の立場から「生産物の疎外」と呼んだような事態、すなわち「労働の対象が……労働者の現実性剥奪として現れ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、我がものとする行為が疎外、外化として現れる」ことであろう（国分幸『マルクスの社会主義と非政治国家』ロゴス、2016年、102頁）。

まさにその通りである。だからこそ引用文に続いて、「疎外論的に言えば、個人的所有の再建とは消費対象としての生産物の『疎外』からの回復ということになる」とあるのは、疑問とせざるを得ない。疎外論的に言えば、疎外された生産物は資本に転化するのだ。疎外された生産物が専ら消費手段に留まることはないのである。それは消費手段であるのみならず、生産手段にもなる。そもそも生産手段それ自体が労働者によって生産される。消費手段だけが生産物で、生産手段が生産物ではないということはいずれもあり得ない。もし生産手段が労働者以外の存在によって生み出されるとしたら、マルクスの資本主義批判全体が意味をなさなくなる。マルクスにとって資本とは労働者の「手の作り物」である。労働者自身によって作られた生産手段であるにもかかわらず、資本となって逆に労働者を手段として客体化することに、資本主義の悪の根源があったからである。

こうしてみると、エンゲルスが生産物を直ちに消費対象と同一視してしまったことが、その後の混乱の震源地だと思える。個人的に所有されるのは生産物とした点では確かにエンゲルスは正しかった。しかしそれは文字通り生産物一般であって、消費手段であるのみならず生産手段でもある。むしろマルクスは文脈的には一貫して生産のあり方を議論している。その意味で、生産物という点では消費手段でもある可能性は排除されないが、主眼としては生産手段が問題になっていると考えるのが自然だろう。

そしてマルクスが個人的所有という言葉を使ったのは、小規模生産者が生産手段を完全に私的所有することによって「自由な個人の発展」の可能性を

育んだように、共同占有という枠内で、かつての小規模生産者の私的所有と類似したあり方で労働者が生産手段と関ることによる教育的効果が期待できると考えたからではないか。もはや否定された *privat* という言葉は使えない。そこで実質的には *privat* を意味する *individuell* という言葉を使ったのではないか。苦し紛れということになるが、私的所有を否定しながら、かつてあった私的所有の肯定的効果を高次に復元することを訴えるための、苦肉の策ではないかということである。

またマルクスの「疎外論的思考」においては、そもそも所有の原理それ自体が否定されている。獲得 *Aneignung* は単なる持つ *haben* として狭量に理解されてはならないというのは『経済学・哲学草稿』の中心メッセージの一つであり、後にエーリッヒ・フロムが強調した重要論点でもある。

とするとマルクスには、私的であることに加えて所有自体を原理的に否定しながら、なおかつ私的所有の積極的側面を継承しながら発展させるという困難な理論的課題が課されたことになる。まさに私的所有を止揚する。私的所有の積極面を受け継ぎつつ否定面を廃棄するということである。これが個人的所有という一見奇妙な言葉に託されたメッセージである。このような複雑な理論的背景があるために、結論的に重要な箇所であるにもかかわらず、マルクスの議論が分かり難くなってしまった。以上が、いわゆる「個人的所有の再建」論の真意ではないか。

本稿はあくまで研究ノートであり、今後の本格的な研究のための覚書として、一つのアイデアを提示したに留まる。卑見では、ここで私が述べたような解釈を提示した研究者はいなかった。しかしこれは私の勉強不足に過ぎず、既に同様の見解が打ち出されていたかもしれない。私はかつて自著の中でマルクス研究者にありがちな「独創病」に注意を促したことがある（『マルクス疎外論の諸相』時潮社、2013年、214頁）。最近でも重度の独創病患者の著作を見る機会があったが、私が求めているのは適切な解釈であって、独創的であるかどうかは付帯的な条件に過ぎないということを改めて強調しておきたい。

付記 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金〔基盤研究(C)課題番号16K03532(分担者)〕に基づく研究成果の一部である。